

「人をつまづかせるもの」(要旨)
聖書箇所：マタイの福音書13章53~58節

【1】 イエスにつまづいた人々

主イエスはご自分の郷里であるナザレに行き、天の御国の福音を宣教しました。しかし今日の聖書箇所には、郷里の人々がイエスにつまづいた様子が描かれています。彼らは何につまづいたのでしょうか。

イエスはバプテスマのヨハネから洗礼を受けた後、ガリラヤ全域を巡り、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、そして民のあらゆる病を癒やされました(マタイ4:23)。イエスの知恵と奇跡を行う力に人々は驚きました。この「驚く」(ekplēro)という言葉は、「外へ」と「打つ」の合成語です。想定を超えたことを目撃し、意識を外へ打ち出すという意味を持ちます。イエスと出会う多くの人々が同じ驚きを経験しました(マタイ7:28, マルコ11:18)。

郷里ナザレにおいても、イエスは同じように会堂で教えました。他の地域でされたのと同様に福音を宣教しました。郷里の人々がつまづいたのは、イエスの宣教する方法や内容が原因ではありませんでした。

郷里の人々は、イエスの教えと力あるわざに注目した他地域の人々同様驚きました。

「彼らは驚いて言った。『この人は、こんな知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろうか』」(マタイ13:54)。彼らは「どこから」と問いましたが、すぐに自分たちで答えを見つけ、問い続けるのをやめてしまいました(マタイ13:55~56)。その結果、「大工の息子」が生意気に思い上がっているのだと、イエスにつまづいたのです。

【2】 人をつまづかせるもの

イエスが「いつも家族がお世話になっています」と挨拶し、大工道具を片手に弟子たちと黙々と作業を始めたらどうだったでしょう。郷里の人々はおそらくイエスにつまづくことはなかったでしょう。「イエス」を知っていると思う人々の想定範囲

に収まるからです。「イエス」のことは分かっていると思い込み、そこから離れようとしない人々は、自分の知らない「神の御子イエス」の振る舞いに驚き、怒り、そしてつまづいたのです。

【3】 理解できなくても心に留めること

ナザレの人々の反応はごく自然です。イエスもそれを承知していました(マタイ13:57)。イエスの身近な家族も当惑しました(マルコ3:21,31~35)。イエスの母マリアこそ最もイエスにつまづいておかしくない立場にありました。生まれた時から見守り育てた我が息子が、「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。」(ヨハネ2:4)などと言おうものなら、悪いものでも食べたのかと心配をするか、怒ることでしょう。しかしマリアは違いました。イエスのことばを真摯に受け止めました。イエス誕生の知らせを受けた時からそうでした。マリアは、自分の理解を超えたことに対し自分の経験を頼りに結論づけることをしませんでした。あくまでも神の前に謙虚でした(ルカ1:38,2:19)。

▶エルサレム巡礼 「…母はこれらのことをみな、心に留めておいた」(マタイ2:52)の(ルカ2:41~52)

▷私たちは「自分は良く知っている」という先入観を持つてはいないでしょうか。自分の理解を超えたことにつまづくことがありますように。今理解できないことも、マリアのように「心に留める」ことができますように。

